

夕食をとろうとしているところに、時々来院する患者が予約もなく来た。

体が痺れると言う。ぶるぶると震えている。家で「持ちにくい」ので、いつものように自分でお灸しようと思っていたら、からだか「痺れて」きた。予約の電話をしようとしたが、手が震えてできず、来院したと言う。

70代半ばの女性で何人かの患者を紹介してくれている。通常の鍼が嫌で、いつも指鍼(指圧)とお灸で治療している。時にはそういう患者がいて嬉しい。指鍼の腕を磨くことができるからだ。鍼がない場合、あるいは使えない場合、例えば災害ボランティアで衛生環境の問題がある場合、あるいは肌が出せないような環境で治療する場合には指鍼が役立つ。

さて、患者にはとりあえず、仰向けに寝て貰った。脳血管障害等、西洋医学向けの救急状態でないかを意識しながら、診察した。

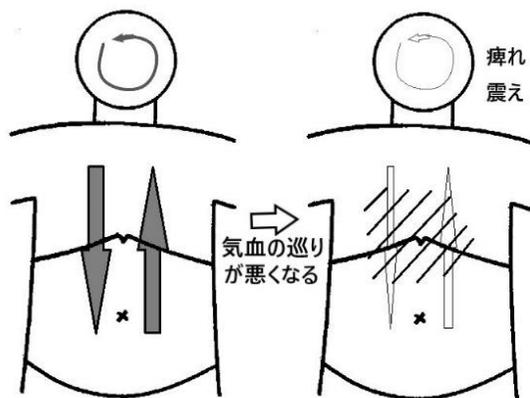
胸下部から心下(みぞおち)周辺に大きく気が滞り、また、頭における気の流れが少ない。脈は拍動は弱く、波打っていない。全身的に血液の流れは悪いことを示している。これだけで、このような痺れや震えを起こす理由にはならない。

まず、手指・足趾の気功ストレッチ(各指趾を気が流れるように引っ張る)を施した。全ての指趾をやり終える頃には、震えは治まり患者は落ち着いた。私も安心した。

うつ伏せになって貰い、滞りが強い胸下部から心下の裏側である背中<sup>せいかん</sup>の中央付近の凝りを、指を立てて横に切る様にやや強めに何度も揉み解した。ここは実の状態で気が余分に溜まっている。

この余分な気を除くと凝りは減っていく。他方、気が少なくなって虚となっている肩甲間部と腰にはお灸をして気を補った。首や肩にも指を当てて凝りを解す。いつもなら、患者は「気持ちいいねえ」と言うところだが、今回はそう言う余裕もなく治療を受けている。話好きな、話を聞いてもらいたそうな、この患者が話すのを受けながら治療しているのだが、今日は眠ってしまった。

仰向けに戻って貰い、診察すると、胸下部から心下周辺の滞りはなくなり、心下は柔らかくなった。頭を診ると、気が巡る様になっていた。脈は波打つ状態となった。



患者は「私、どうしたのかねえ」とポカンとした様子で立ち上がり帰っていった。

この患者は繊細で細かい感じではなく、精神的にも肉体的にも強そうだが、若い頃から親族関係の問題を抱えてい

て、心晴れない状態が続いている。それが胸下部から心下にかけての滞りとなり、そして首・肩の凝りとなっていた。自分でお灸で何とかしないと、来院していた。背中には激しいお灸の跡が残っている。めくら減法のお灸で、見るに耐えない。

今回は特に胸下部から心下周辺の滞りが強くなり、そのために全身の気の巡りが悪くなった。脳においても不順となり血流障害も起こし、全身の痺れ感、震えを惹起するに至ったということだろう。患者の脳に器質的な、つまり表面化されていない脳血管障害があるのかもしれない。今度来院したら、病院における検査を促してみよう。

(2018年8月処暑)